

松江のハーン(二)

——「英語教師の日記から」と「ある日本の庭で」——

牧野陽子

三 英語教師として

●島根県尋常中学校

ハーンは松江で神々の国の夢想にばかり浸っていたわけではない。松江到着の三日後にハーンは島根県尋常中学校に出校し、その翌日からさっそく授業を開始している。

明治三年に教員伝習校変則中学校として発足したこの学校は、十八年の中学校令の発布による一府県一中学校制に沿った五カ年制中学校として、十九年に島根県尋常中学校と改称した。独立校舎が完成したのが明治二十年、五カ年制の第一回卒業生を送りだしたのが二十一年のことだから、ハーンが明治二十三年に着任した時は、建物も真新しく、県下の秀才を集めて生徒教員ともに若々しい気概にあふれていた。

校舎は大きな二階建ての洋風木造建築で、濃い青鼠色に塗られていた。松江城に近い一角に師範学校と同じ敷

地内にあって、通りを隔てた向かいには、やはり洋風建築の県庁が建っていた。

当時中学校には通学生が三百人、師範学校の方は寄宿生ばかり百五十人の生徒がいた。ハーンは中学校の所属だったが、師範学校の方でもクラスを持ち、月曜日から土曜日まで毎日午前中に約二、三時間ずつ、合計二十時間というかなりきつい時間割りをこなしていた。

初日にハーンを案内したのは教頭で同じ英語担当の西田千太郎である。両校の校長や同僚たちに引き合わせ、時間割りや教科書についていろいろ注意を与えてくれた。外人教師のために各教室名は英語で記されてあったが、ハーンが慣れるまで当分の間、西田が毎回ハーンを教室まで連れていき、ハーンが少しでも授業に入りやすいように、あらかじめ生徒に予習させておいた。

最初に教壇に立ったときの感想を、ハーンは「何か嬉しいような、改まった気持ちになった」と述べている。実際、これまで新聞記者と文筆業をなりわいとしてきたハーンにとって、教師という職業は、全く経験のない、初めての試みであった。英語教師の職を希望したのは、日本に長期滞在するための一番手っ取り早い手段だったからにすぎなかった。従って自分にはたして合うかどうか不安もあったろう。だが、結果的に、教職はハーン(1)の第二の天職となる。

後、東京大学で英文学を講じた時は、その内容もさることながら、原稿もなしに静かに歌でも歌うように朗々と語る独特の口調が学生達を魅了し、長く語り草となったが、島根県尋常中学校でも明快で懇切丁寧な授業に生徒たちは引き込まれていった。時には、遙かな南の国のことなど、面白い雑談もしてくれた。そしてハーンは生徒の心をとらえ、強い印象を与えて、松江を去った後も慕われ続ける。

一方ハーンの方も、生徒に語らせ、作文を書かせることで日本人のものの考えかたを知るよすがとした。現代の日本で外国人英語教師が会話のクラスを持つと必ずこぼす感想は、クラスの生徒たちがほとんど自発的に発言しようとしないう、したがって会話の練習ができない、というものであるが、いまだ敗戦を知らぬ明治の島根の生徒は物おじする様子もなく、ずいぶん活発なやりとりがなされたらしい。ハーンは「教室で外国に関する話題を出して会話をさせると実に面白く、なるほどそういうものかと思わせられることも少なくない」と述べている。

● 師弟関係

ハーンが島根の中学校の校風になじむにつれ、意外に思ったことは、教師と生徒が主従関係にないということだった。

「この生徒達は私のことを『サー（旦那さま）』と呼ばないで『ティーチャー（先生）』と言う……（中略）……教師は単に教師であって、英語的な意味での支配者ではない。生徒達に対しては兄のような関係に立つ。自分の意志を押しついたりはない。……罰することも滅多にない。ましてや、生徒を打つようなこともないが、仮にそんなことをすれば、早晚辞職ということになるだろう。……事実上日本の学校には罰は存在しない。……英国人やアメリカ人には不思議に思われるかもしれないが、西欧では懲戒を必要なものと見なしているのとは対照的に、日本の学生たちは自主独立を要求し、またそれを享受している、西欧では、教師が生徒を追い出すが、日本ではその逆のことが時々起る。」とハーンは記している。

ハーンは、ここで昔、自分が通わされた神学校での人間味のない教育と師弟関係の冷たさを思いだしていたに

違くない。神学校でなくとも、英国ヴィクトリア朝の学校教育は、上はイートン校などの寄宿制のパブリック・スクールから下は孤児院まで、一般に極端なほど厳格を旨とした。教師(マスター)はその名の通り絶対的な主人として生徒を支配し、服従しないものには容赦なく体罰を加える。たとえば、シャロット・ブロンテの『ジェイン・エア』に印象深く描かれているように、何かといえは生徒に両手を差し出させ、掌を教師が答で何回も打つ、というのがよくある罰の形だった。軽い方では、黒板に「私はもう……しません」と四、五百行も書かせたりした。教師に対して返答するときは必ず「イエス、サー」「イエス、マアム」と言い添えなければならぬ。ハーンはそういう学校の先入観があったから、後進国日本の片田舎の中学校での師弟関係に驚きを禁じえなかった。

明治の二十年代、新しい教育制度の創草期の生徒達はもちろん儒教的礼節をもって師を敬うよう躰けられていたが、冷静に教師の資質を判断し、その判断を即実行する激しさを持っていたらしい。ちょうどハーンの在任中、ある若い新卒の化学教師の解任を要求して生徒達が結託して授業をボイコットするという事件があった。新聞にも報道されて世間の話題となったが、結局学校側の調査の結果、教師として経験にも知識にも欠けると抗議した生徒側の言い分に理があるということ、その教師はやがて転出するはめになる。この時ハーンはただ驚き半ば感心しつつ傍観していただけだったが、のち、ハーンを擁護して東大の学生たちがやはり同じように当局と渡りあうことになると思ひもよらなかつただろう。

ハーンはこの島根県尋常中学校での一年余りの見聞を逐次『ジャパン・ウィクリー・メール』という英字新聞に投稿し、後に「英語教師の日記から」というエッセイにまとめた。授業の様子や行事の記述もさりながら、特に興味深いのは、実名で登場する何人かの人物描写である。それが当時の若者の西洋人に対する気負いや心配り、武士魂を描き、味わいのある人間群像となっているばかりでなく、そこにハーンの終生一貫した人間観、文化観がうかがわれるからだ。

●籠手田安定知事

最初に登場する県知事の籠手田安定とは、授業開始前、西田と共に県庁に挨拶に行った時に会った。西洋風に絨毯を敷き詰めた広い部屋の中ほど、小型の円テーブルに役人を五、六人従えて座っていた紋付き羽織袴姿の知事は、椅子から立ち上がると「巨人のごとき握手」でハーンを迎えたという。そしてハーンは、「その眼を覗き込んだ瞬間、何ともいえぬほどこの人が好きになった。少年のようにささええした無邪気な顔立ちは、淡白率直で落ち着いた雰囲気があり、いかにも寛大で親切そうだった。この人に比べると周りの連中はひどく小さく見えただ。……昔の日本の英雄もおそらくこの人と同型（も）だったのではないかと述べている。長崎県平戸藩の土族で、滋賀県令などを経て明治十八年に島根に任命された籠手田安定は、たしかに県民の評判もよかったらしい。だがハーンが何故これほど強い印象を受けたか、その理由は、知事がハーンに向かって発した最初の言葉にあったと考えて間違いない。

知事は、ハーンが出雲の歴史を知っているかどうかをまず尋ねたという。来日四か月、日本語も話せぬ外人英

語教師に対する最初の質問としては唐突とも思えるが、これが逆にハーンの場合は嬉しかった。チェンバレン記の『古事記』を読んだことがあるので、少し知識がある、そして日本の昔の宗教や伝説、風習に関心があり、と西田に答えてもらう。すると知事は、杵築、八重垣、熊野の神社を訪れることを勧め、神社の前で拍手を打つ習慣の由来を知っているかと尋ねた。ハーンが否、と答えると、それは宣長の『古事記伝』の第十四卷三十二章に八重事代主神が手を打ったことが記されている、と教えてくれたという。籠手田安定は、外人英語教師の雇い入れに一年間奔走してハーンの前任者タートルの招聘にこぎつけた開明的な人だが、このやりとりからわかるように、一方ではまた熱心な国粹保存家としても知られていた。剣の達人でもあり、昔風の槍試合や競馬を復興し、武道場興雲館を建てた。

ハーンは概してエリートよりも無学な庶民の方に心を寄せた人であり、『こころ』などのドキュメンタリー風のスケッチには、無名の大衆の姿を通じて日本人の内面生活が描かれている。だがハーンの好悪を分かつのは、社会階層ではなく、日本の民族伝統に対するその人の態度の如何にあった。無意識に自然に民族性を体現する庶民とは異なつて、知識人ならば内的葛藤をへてでも自覚的に伝統を次世代へ伝えてゆくことをハーンは求めた。ハーンが出会つて鮮明な印象をうけた何人かの知識階級の人は、この籠手田安定にしても、またいかにも明治という時代を感じさせる数奇な運命をたどつた熊本の人や横浜の雨森信成とはこれから出会うことになるが、いずれも日本人としての抛り所を伝統への回帰にみいだした人たちだった。

そしてそういうハーン思想は、一つの文化の尺度で他の文化を一方的に断罪することを許さぬ、いわば文化相対主義であつたといえる。この価値観は、生徒との交流の中にも表われている。

●前任者M・R・タートル

島根県尋常中学校で生徒達の不評を買ったのは、先の未熟な化学教師だけではなかった。ハーンの前任者の外人英語教師、M・R・タートルも悪評のために契約任期半ばで退職させられていた。このタートルなる人物については、カナダはノバスコシア出身の年若い宣教師だったということ以外、知られていない。だが、生徒をキリスト教に改宗させようとしたり、ことあるごとに日本の風習や信仰の悪口を言って物議をかもししていた。しかも、生徒の回想によれば、大変な寒がりで、特別の部屋でストーブをたき、そこへ生徒を代わる代わる呼んで教えた。そのうち頭巾を被り、やがてストーブの前に毛布を敷いてごろっと横になる。また長い脛で教室の机をまたいで歩いた、というから、生徒側が憤慨したのも無理はない。氏の行状に懲りて、ハーンとの契約文には、生徒に対し宗教活動を行わないという条文が付加されていた。そしてタートルのことをハーンが知るのには、天長節のあと、一人の生徒との会話の中であった。

●天長節

ハーンはいろいろな行事に出席した。松江城郭内の広場で知事臨席のもと大々的に行われた県下全学校合同の秋の運動会にも、また教育勅語の発布後取り行われたその奉読式にも参列している。その日、朝講堂に集まった生徒たちを前に、知事が絹表装の巻物を厳かに朗読し、簡単な訓示を垂れて勅語の意味を説明した。淡々として気負いのないハーンの記述をみると、今想像するよりも意外に簡素で短い儀式だったらしい。

十一月三日の天皇誕生日にも、一同朝の八時に講堂に会し、大礼服に身を包んだ知事を迎えた。オルガンの伴奏で国歌を斉唱し、演壇の御真影に向かって礼をした後、知事が簡単な話をし、再び国歌を斉唱して解散。「後はその日を愉快に遊んで過ごす」というのが、ハーンの説明である。ハーンはこの時、客人として礼を尽くして、一緒に深々と頭を下げた。

生徒達はハーンが単に魅力的な英語の授業を行うだけではなく、杵築に参拝したり、登校するときには洋服でも帰宅後は着物でくつろいでいることを知って、今度の外人教師は違う、とすでに感じていたはずだが、決定的に心打ち解けはじめたのは、おそらくこの天長節でのハーンの行爲を見た後だったにちがいない。

ハーンは一人の生徒と次のような会話を交わしている。

石原は武家の出身だが、類い稀なほど豪胆な性格の持ち主でクラスでもなかなか幅を利かせている。他の学生達に比べると、態度物腰がぶっきらぼうで尊大な感じがするが、正直な男らしさに溢れている為、少しも不快の念を起こさせない。……(中略)……私達は大変仲良くなった。時々私に花を持ってきてくれたりする。

ある日のこと、美しい桃の枝を二本持ってきてくれて、こう言った。

「先生は天長節の式に陛下の写真に礼をしておられました。前の英語の先生とは違いますね。」

「どうして」

「前の先生は、日本人は野蠻だと言われました。」

「それはまた何故」

「その先生は、神、といってもその人の神ですが、その神以外には尊敬に値するものはなく、それ以外のものを尊ぶのは無知で野蛮な人種だけだと言われました。」

「どこの国の人です。」

「キリスト教の牧師で、英国臣民だと言われました。」

「しかし英国臣民であれば、女王陛下を尊敬しなければならぬはずで、英国領事館に入るにも脱帽しなければなりません。」

「本国でどうなさっているかは知りませんが、とにかくそう言われたのです。私達は陛下を敬愛すべきだと思いますが、前の先生は、日本人は野蛮だ、無知な野蛮人だと言われたのです。先生はどうお考えですか。」

「それは君、その先生こそ野蛮人だと思う。野卑で無知で分からずやの迷信家です。陛下を敬い、父祖伝来の神々を敬い、日本の宗教を大切にすることが、君たちの務めです。また、先ほどのように馬鹿げたことを言う者があれば、どんな者であろうと、その言葉に対して憤慨するのが君たちの義務というものです。」

ここで「前の先生」というのは例のタートルのことである。そして一方では東京の第一高等学校の内村鑑三が日本人でありながら拝礼を拒否していわゆる「不敬事件」(一八九四年一月)を起こしたことも聞いていたから、ハーンは自分の生徒に西洋文明に媚びへつらわぬ気骨のあることを知って好ましく感じたのだろう。

もう一人、ハーンがひいきにしたとされる生徒がいる。それはクラスで成績が一番の横木富三郎、切れ長の目のひっそりとした顔だったが、笑うと笑顔が愛らしい少年だった。大工の息子で家が貧しく、素封家の援助を受

けて中学に上がっていた。この一見もの静かな勉強家の横木が意外な面を見せた事件があった。

ある時、キリスト教の宣教師が卑しい手段を用いて人を改宗させようとしたが、横木は大胆にも当人の家に乗り込んで、そんなやり方は怪しからぬと言い張り、とうとう相手をやりこめてしまった。仲間達は、彼の論法が巧みだと言って褒めたが、横木が答えて言うには、「いや、もっとも巧くなんかない。道徳的な悪に反論するのは巧くなくともよい。自分が道徳的に正しいんだという信念がありさえすれば充分だよ」⁽⁶⁾。

この宣教師がタットルのことか、それとも当時松江で伝道活動に従事していた他の人物のことかは明記されていない。一八九一年四月にはバークレー・F・バクストン（一八六〇—一九四六）という英人宣教師が松江に来て、長く留まることになるのだが、その前にいた人間が問題らしく、ハーンはチェンバレン宛の手紙（一八九三年二月四日）⁽⁷⁾で、松江ではその「けだもの連中」のために、自殺したり発狂したりなどの悲劇的な事件が起きた、と怒りの口調で報告している。

ハーンはたしかにキリスト教よりもギリシャや日本の多神教の方に心の安らぎを覚えた人である。しかし、晩年まで聖書を大切に持ちつづけ、子供にも聖書を読むように言ったことからわかるように、必ずしもキリスト教の教え自体を拒否したわけではなく、ただキリスト教が宗教組織として見せる非寛容な排他性と唯我独尊性を憎み、日本の習俗に対する宣教師たちの依怙地なまでの無理解と傲慢さに腹を立てていた。それだけに、横木の毅然とした行動には快哉を送ったに違いなく、ハーンが親しくした何人かの学生の中でもとりわけ横木や石原を

愛したといわれるのは、二人の優秀さのみならず、こうしたことが背景にあったと思われる。

ハーンについては、かつて一般に定着していたひとつのイメージがあった。それは、ハーンが日本を二つの側面、つまり古い日本と新しい日本とに分けて見ており、古い昔ながらの人情風俗は愛したが、西洋型の国家として近代化していく日本は嫌った、というものである。しかし『知られぬ日本の面影』の中のハーンの紀行文には、民話や迷信とともに、松江新大橋の盛大な開通式の様子や美保関港に入港する帝国海軍巡洋艦の姿なども盛りなく盛り込まれ、古いしきたりと近代化の努力の両極端が混在する明治という時代の地方都市の様子が違和感なく一つの生き生きとした総体として描かれているし、又勅語や条約改正などに関するチェンバレンとは対照的なハーンの言動をみる限り、ハーンは日本の西洋諸国に伍する近代国家としての体制整備を好意的に応援していた。問題は、いかに、いかなる心構えで近代化するかであって、その際、怒濤のごとく押し寄せる西欧文明とその価値観の波に抗して、日本の伝統文化および祖先伝来の宗教心を保持するだけの自負と気骨を持ち合わせるかどうか、以後も一貫してハーンの評価と好悪の感情を分かち基準となるのであった。

チェンバレンは滞日生活に終止符を打つ時、「長年の植民地生活での錆を落としたい」と言い放った。⁽⁸⁾それが当時の平均的西洋人の考え方とみていい。タートルの行爲も、当時の在日英米人、および内村などのいわゆる進歩的文化人たるクリスチャンの日本人には、当然のことと受け止められ、擁護されていた。チェンバレンもその一人で、『日本事物誌』には、勅語および拝礼に対する厳しい批判の言葉がある。そして後に「英語教師の日記から」が出版されて、ハーンのくだんの記述がチェンバレンの目に触れると、それが両者の対立の要因となっていたとする説もある。⁽⁹⁾そういう中でハーンの状態は異彩を放つ。だが、この場合、ハーンはチェンバレンや

松江のハーン(三)

ロティなどと同じ立場の西洋人とはいえない。ハーンは西欧世界のなかでは、常にマイナーな文化圏に属していた人なのである。ハーンの母の国ギリシャは、かつての古代の黄金期の栄光はどこへやら、政治的には、帝国主義列強の間にはさまれてイギリスの保護下であり、半植民地化していた。ハーンはそこで駐留英軍と土地の娘の混血児として生まれ、母親はやがて父に捨てられる。そしてそういう父の故郷アイルランドでさえ、大英帝国のなかでは、アングロサクソンに征服され僻地に追いやられたケルトの民の地だった。ほんの百年前までイギリス人と地元のアイルランド人との婚姻を禁ずる法律さえあったくらい、その力関係は歴然としていた。ハーンの家はイギリス系だったとはいえ、ハーンがいったんアイルランドを出てイギリス本土及び大陸へ行けば、イギリス人ではなくアイルランド人と目されただろう。濃い茶色の髪に茶色の目、短身でがっちりとしたハーンの体格も、ハーン自身は母のギリシャの血の証と想っていたようだが、周囲にはケルト人の身体的特徴と映っただろう。現にアメリカに渡ってから困窮したハーンを助けたのは、いつもアイルランドやスコットランド出身のケルト系移民だった。そしてハーンが日本で西洋文化絶対主義を否定し、この島国の民族的独自性を擁護しえた裏には、ハーン特有の民族的背景に根ざす一種の心の痛みのようなものがあつたと考えていい。

四、城下町の生活

●転居

ハーンは十一月ごろ、富田旅館を出て、末次本町にある織原という人の家の離れを借りて住むようになる。チェンバレンにはこの転居のことをさっそく嬉しそうに報告した。

私はもう旅館にはいません。湖に臨んで建った一軒の非常にきれいな家が私にはあるのです。窓から望遠鏡で望むと、青い湖水の美しく広がる彼方を、ほとんど杵築まで一望のうちに見渡せます。目にふれる峰という峰は、どれも神にまつわる物語があり、その多くは太古の神々にちなんだ名前がついています。

ここでは大いに歓待されています。ただもう少し著作をする時間があれば、これ以上の幸福はないのですが。今は忙しい時期です。試験が始まりました……私は大きなクラスを十二も担当して、書き取り、講読、作文、会話の試験をした上で評点を過ぎなくてはなりません。……（一八九一年十一月）

それまでの旅館住まいでは何かと不自由なのが転居の理由だろうが、そのきっかけは、富田屋の主人が女中のノブの眼病を治療させないのに腹をたてたことだった。ノブは主人の養女でもあったため、ハーンは「珍しい不人情者、親の心ありません」⁽¹⁰⁾と大層怒ったという。ハーンは自分自身が片目を失明していてもう片方も極度の近視だったから、後年、子供や書生に対しても読書の姿勢などを口うるさく注意しては目を大切にしよう言い聞かせ、眼の悪い人には常にひどく同情した。だが、旅館から引越して後も、訪ねてきた近所の人が富田屋の主人の友人と聞いただけで「あの不人情者、私好みません、さようなら」⁽¹¹⁾と追い返したというエピソードは、ハーンの気性の激しい面をうかがわせる。結局ハーンは自分でノブを医者にかけて全快させた。医師はハーンの熱意

に打たれ、報酬を取らなかったので、ハーンはそのお礼にこもかぶりの四斗樽とマニラ煙草教箱を届け、この話は美談として山陰新聞に報道された。このころには、ハーンは地元の名士として、その挙動が注目されるようになっていたのである。

学校の教師生活は軌道に乗り、相変わらず西田千太郎が濃やかな心配りを見せていた。後、東大でのハーンはわずらわしい講師控室に入るのがいやさに、三四郎池のまわりをうろうろと散歩したが、ここ松江のこじんまりした教職員室には静かな安らぎがあった。机の上に、白地に藍の模様火鉢がひとつずつ置いてあり、授業の合間の休み時間には十四人の同僚が銘々真鍮や鉄、銀でできた煙管でたばこを吸う。西田以外にも英語を話せる教師が二、三人いて、時に会話を交わすこともあったが、たいていは黙って静かに熱い茶をすすり、疲れを癒した。そういう満ち足りたひととき、時を刻む時計の針の音と、小さな煙管を火鉢に打ちつけて灰を落とす鋭い音だけが聞こえた。

もともと大の煙草好きのハーンは、横浜にいた頃より真鍋晃が煙管を扱う様子に注目していたから、自分も職員室の輪に加わって、この極めて敵かて優雅な煙草の吸い方を大いに楽しんだ。様々な彫り物が施してある装飾的なものばかり百本にもなるハーンの有名な煙管のコレクションを始めたのもこの頃である。

●日本の家のたたずまい

ハーンは晩年まで畳に障子の部屋を好んだが、日本家屋特有の情緒を知ったのは、この穴道湖畔の家でだろう。

雪見障子の風情を面白く思い、チェンバレンあてに「帯状にガラスを嵌め込んだ障子は、腰を下ろすと『不思議に戸外にいる』ような、立ち上がると『居心地悪く屋内にいる』ような気分になる」(一八九一年五月二十二日)と述べている。また日本の家の夜の様子を「晩は灯火が暗くて楽しみがない……行燈は哀れな嘆かわしい器具で、家族はこのみじめな『見える暗闇』のまわりに集まる」と描写したのはイザベラ・バードだったが、ハーンはまるで谷崎潤一郎の『陰影礼讃』を思わせるような感性で「川向こうの家々の幅広い障子が、こちらからは見えないランプの黄色い柔らかな光りを浴びて、その明るい紙の表に動き回るほっそりした優美な女の影が見える。せめて日本ではガラス障子がどこでもかしこでも使われなくなるなどということにならないようにと私は心から願う。そうなればこういう美しい影が見られなくなるから」と書いた。

中学校の生徒たちは、ハーンの家にも訪ねてくるようになり、民俗好きのハーンのために、阿弥陀如来の掛け物や木彫りの猫など、家にある珍しいものを手に手に持ってきて見せてくれた。そういう時、ハーンはその生徒たちを書斎に通し、自分も座布団に正座してお茶とお饅頭をだした。正座にも慣れて、「食事をするのも、読書をするのも、煙草を吸うのも、おしゃべりをするのも、一番楽で自然なこの姿勢が良い」と言うほどだったが、ペンでものを書く時だけは手首を支えなくてはならないから椅子の方がいいとして、近眼用に高くした特製の机と椅子を愛用した。

●日本風の生活

イザベラ・バードの紀行文には、バードが旅先で何とか肉類を手に入れようとしては失敗し、悪戦苦闘する様

がユーモラスに記されている。バードが毎日簡単に入手できた動物性蛋白質は魚以外では鶏卵だけだった。バードによれば、日本食というのは「ぞっとするほどいやな魚と野菜の料理」であるため、在日西洋人の間では食物の問題が常に重要な話題であり、外交官、教授、宣教師、みな自分の経験を真剣に語って助言してくれた⁽¹⁵⁾という。だがハーンは、宿で出される御飯におかずの和食を何でも食べた。当時松江に一軒だけあった洋食屋も、ほとんど利用せず、パンを取り寄せたりすることもなく、チェンバレンに宛てて「私は意地悪にもパン屋を非常に驚かせたのですが、頑としてパンを買うことを拒否してその地元の製パン業者をがっかりさせています」(一八九一年五月二十一日)と書いている。ただハーンも栄養の点からか、好物の生卵を毎日欠かさなかった。

一方、西田など同僚を自宅に招いた折には、手料理の洋食を振る舞っている。ハーンはかつてアメリカのニューオーリンズでの記者時代、自炊して料理の腕を上げ、食堂の経営に手を染めたことがあった。ハーンは一週二十ドルの給料のうち、生活費を僅か数ドルに切り詰めて百ドルほど貯金し、それを開店資金としたのだったが、この時は共同経営者に騙され、有り金奪われて僅か一カ月で営業停止、負債のみが残った。食堂を開いた目的は南米行きの旅費捻出にあったものの、「南部一の安く美味しい料理の店、何でも一品五セント」と銘打ち、メニューを考えて毎日『アイテム誌』に広告を出すのは、やはり根が料理好きでなければできない。数年後、今度ハクレオールの民族料理の作り方を集めて、『クレオールの料理』という本を出版した。ちょうど土地のクレオールの様々な風俗や言語に興味を覚えて取材していたころのことである。一般に文化人類学者たちがアフリカやアジアの部族社会に溶け込もうとする時、まず同じ食べ物を口にするのが鉄則となっているが、ハーンが和食で通したのも、料理をその文化の現れと見ていたからだろう。

ハーンは、宍道湖畔の『栗原屋』という蕎麦屋からの夕日の眺めが素晴らしかったこともあってその店が気に入り、散歩の帰りによく立ち寄った。また、西洋人が普通はいやがる漬物も好んで食べた。

「私は土地の人がいうところの『上戸』になってきました。そして日本酒を愛飲していると、食習慣や好みまですっかり変わることを知りました」とチェンバレンあてに書き（一八九一年八月）、「私が熱烈なる大根好きになったと聞いてぞっとなさるでしょうか？ それも新鮮なる大根ではなくて、あの強烈な臭いの、古漬の大根なのです。でも、そんなことを言ったら、ヨーロッパのstuhlton・チーズやリンバーガー・チーズだって、変な代物であることに変わりありません」と述べてチェンバレンを驚かせている。

万事日本風の生活を旨としたハーンも、ひとつだけ苦手だったのは、廁の臭いである。中学校では、必ず帽子を目深かにかぶり、パイプを一杯にふかしながら、用足しに行ったらしい。日本では「手水場の神」といって便所にまで神様がおられることに興趣を覚えてチェンバレンに手紙で報告した時（一八九一年六月）も、便所が規則正しく掃除されないと怒るという「この神様は非常に上品な敬うべき人柄で、道徳と衛生の問題に関しては卓見をもっているのです。私は彼に神灯を奉じるだけでなく、香を焚かないわけにはゆきません……その理由は言わずともおわかりになるでしょう。……」とユーモアをまじえてつけ加えている。

●西田千太郎

ハーンは名所旧跡めぐりの間をぬって、宴会や会合に出掛け、自宅に同僚をよんでもてなし、町の催しものに参加した。晩年の交際嫌いからは想像できないほど、実に社交的に松江の人々と交わっている。

散歩の途中、龍晶寺という寺の境内でみつけた小さな石地蔵がとても気に入り、さっそくその作者を聞き出して訪ねて行ったこともあった。ハーンが「貧しい天才」と尊敬したこの老いた彫刻家、荒川重之助は職人かたぎの頑固者だったがハーンとは気が合った。

また十月二六日には、島根県教育会の総集会で県下の教師を聴衆に「教育の要素としての想像力の価値」と題して長大な講演を行った。教育会では後に「西インド雑話」「道徳哲学」という題でも講演し、いずれも好評を博している。

十月の講演の時に通訳したのは西田千太郎だった。西田は松江時代を通じて、ハーンといちばん親しく触れ合った人物である。知り合ってまもなくハーンはこの十四歳年下の男と真の友情を結ぶようになる。そして松江を去つてのちも、生徒以外では西田とだけ、終生温かい情のこもった手紙をやりとりしている。チェンバレンはハーンについて、決して友達づきあいの長続きしない人間だとやや悪意をこめて後年書き記している。だが西田は、ビスランドやマクドナルド、雨森とともにハーンが仲違いすることもなく最後まで信頼と友情を持続させた数少ない友人のひとりだった。

西田は教頭としてハーンを招請した責任から世話役にあたったのだったが、その気配りは実に行き届いていない。学校のこと以外にも、日常生活の身の回りのことに心をくだけ、ハーンの研究調査の面でも助力を惜しまなかった。ハーンから民俗的な事柄に関して資料などの入手を頼まれても、少しも面倒がらずにハーンの要望に応えた。ハーンは後に『東の国から』を西田に捧げたが、実際、ハーンの松江時代の作品には西田の協力が大きく預かっていたと指摘されている。

西田は文久二年（一八六二）松江藩士の長男として生まれた。松江中学校卒業前にそのまま同校の授業助手に採用され、一時上京して米国人について二年間学んだ。再び戻った母校では、英語の他に歴史、地理、博物学、経済などを教えた。戦後子息によって公開された西田の日記には頻繁にハーンの名が登場し、三日にあげず往来した生真面目な世話ぶりが偲ばれ、その簡潔なカナ混じりの漢文の文体からは、いかにも明治の士族らしい落ち着いた柔らかな物腰が浮かんでくる。ハーンは西田を心から信頼し、「利口と、親切と、よく事を知る、少しも卑怯者の心ありません、私の悪いこと、みな言うてくれます、本当の男の心、お世辞ありません、と可愛らしいの男です」とセツに語っていた。

だが、西田は体が弱く、病で始終苦しんでいた。そして講演のときも、当日咯血が三回もあったのを止血剤で抑えながら通訳を敢行するという痛々しい状態だった。講演が終わるとそのまま倒れ、数日間床にふせていた。ハーンは心配して連日人力車を走らせて見舞いに行っている。ハーンが西田宛てにこまめに出した手紙には、ほとんど必ず西田の体を気づかう言葉がある。熊本に行つてからは、沖繩など暖かい土地への転地療養を真剣に勧めてもいる。「ただあの病氣、如何に神様悪いですね、私立腹。あのような善い人です、あのような病氣参ります、ですから世界むごいです、なぜ悪き人に悪き病氣まいます(17)」と東京に行つても始終氣にしていた。七年後の明治三十年三月、西田は三十六歳の若さで結核のために死去する。

●神々の国の冬

十二月に入ると、「神々の国」にも厳しい冬がやってくる。

松江のハーン(二)

ハーンはこのころ、印判屋に行って自分の印鑑をつくった。ハーンには帰化する前に使用していた「へるん」という印が三種ほどあるが、この時作ったとされる「遍留ん」の印は同伴した西田千太郎の助言か、万葉がなの漢字がハーンの境涯を連想させて味わい深い。

ハーンはまた正月用に紋付きを仕立てさせた。紋所はハーン家の祖先ノータンバランド・フォード城主サー・ヒュー・ド・ヘロンの旗標で、その発音鷺(Heron)を日本風に図案化した下げ羽の鷺である。元日にはこの新調の紋付き羽織袴に白足袋という出で立ちで人力車に乗り、嬉しそうに年始の礼に廻った。ただ履物だけは、下駄が不慣れだったために靴だったという。

山陰は雪深い土地柄であるが、この冬は特に寒風が吹きすさび、例年になく豪雪に見舞われた。もっぱら熱帯の自然風物を好み、ニューオーリンズや西インド諸島などで暮らしてきたギリシャ生まれのハーンは、寒さに弱く、ろくな暖房設備もない松江の冬が身にこたえた。いかに日本家屋のたたずまいに風情を感じていたとはいえ、隙間風にさらされる和室の冷え込みは耐えがたかった。そしてついに風邪をこじらせて教週間寝込んでしまう。ハーンはチェンバレン宛てにこうしたためている。

天候の悪さは悪魔的です……肺をひどく冒されて、ここ教週間ほど病床に臥せております。こんなふうには熱烈な感激に水をさされて、始めて苦々しい失望を味わいました。こうした冬があと二度も三度もめぐってくるならば、私は地下に葬られることになるかと思えます。しかし今年の冬は特別だと言います。杵築の方を見渡す私の湖畔の家のまわりには、最初の吹雪で五フィートもの雪が積りました。あたりの山々は白一色で

す。出雲全体が雪にすっぽりとおおわれています。風は容赦なく吹き荒れます。これほどすさまじい豪雪はアメリカでもカナダでも見たことがありません。ただし、寒暖計の目盛りはあなたが想像されるほどではありません。せいぜい華氏十二度程です。しかし、どの家も家畜小屋のように寒いのです。火鉢や炬燵などは暖かきの影——幽霊のような幻にすぎません。今は気分が滅入っているのです。明日になれば、またすべてが明るくなるかもしれません。当局の人々は驚くほど親切です。もしそうでなかったら、私はどうしてよいのか途方にくれていたでしょう。(一八九一年一月)

ハーンは松江に赴任して以来ずっと心地良い興奮に浸っていたが、凍えるような家のなかで一人布団のなかで震えながら、ここへきて始めて、不安と心もとなさを味わっていた。西田は病み上がり体の押して、毎日ハーンを見舞ってくれた。また籠手田よし子はハーンのもとに見舞状とともに籠に入れた鴛を届けて、その「ホーホケキョ」と歌う美しい鳴き声がハーンの心を慰めた。しかし、ハーンは身体が衰弱していただけではなく、精神的にもかなり落ち込んで不眠に悩まされていた。ハーンが生涯の良き伴侶となる小泉セツ(節子ともいう)と出会ったのは、ちょうどこの病気のころだった。そして、この出会いがハーンの後運命を決定し、日本に骨を埋めさせることになる。

●小泉セツ

セツとの結婚の時期と経緯については、長男の一雄の回想や西田の日記などをもとに諸説あったが、現在で

は、一月下旬ころに、家主の織原氏の仲立ちでセツが住み込みでハーンの身の回りの世話をするために入ったのがきっかけとされている。それまでも食事の世話などをする旅館から通いの女中はいたが、ハーンの病状を見兼ねての配慮だった。その後、六月に北堀の根岸邸に移るころには、すでに同棲関係にあり、八月ははじめごろに内輪の祝言がおこなわれて披露されたと考えられている。西田日記での記述も「ヘルン氏の妾セツ」から八月以降「セツ氏」「小泉セツ」に改まる。

松江藩士小泉湊の次女セツがハーンの家に入った時は二十三歳で、すでに苦勞を重ねていた。小泉家は維新前は五百石の家柄であったが、秩禄処分後、土族の商法で失敗して零落する。そのため、セツは幼いころに親類の稲垣金十郎家に養女にやられた。だがこの養家も似たような事情で困窮の極みに至ったためセツは中原小学校下等科を終えたのみで、それ以上は通わせて貰えなかったという。そのあたりにふれたハーンの長男小泉一雄著『父小泉八雲』によれば、セツは退学を強いられた当座、一週間くらい泣き続けたらしい。十九歳の明治十九年、前田為二という男を婿養子に迎えたが、甲斐性のない為二は一年あまりで蒸発してしまう。夫が大坂にいるとの報せを受け、人を介して帰るように説得しても効果がないので、セツは自分で工面した金を懐に迎えに行った。だが、逆に愛想づかしの冷言を浴びせられ、この時「よほど橋の上から投身しようかと思ったが、親たちのことを考えて思いとどまった」と後に一雄に語っている。為二とは明治二十三年の一月に離婚し、セツは養家から実家に復籍した。生活は相変わらず苦しく、もっぱらセツの機織りと針仕事で支えていたという。

ハーンとセツが単なる雇用関係から実質的な夫婦になった過程には、両者ともそれぞれの想いがあっただろう。だがハーンが、病み上がりの自分に尽くしてくれるセツの優しさに心和むと同時に、西田などからセツの事情を聞き知るにつれ、その境遇に大いに同情したことは間違いない。

ハーンには、母ローザの境涯のことが常に念頭にあったからか、普通の娘よりも、苦勞をしたやや年嵩の女に心ひかれるところが以前からあった。アメリカのシンシナティでハーンが二十代のころ一時内縁関係にあった黒人混血女性マティー・フォーリーも、白人に騙されて捨てられたあげく子供を抱えて、ハーンのいた下宿で働いていたのだった。ふたりが結ばれるきっかけが、やはりハーンが高熱をだして寝込んだ時に親身になって看病してもらったことだというのも不思議な偶然である。

家計を助けるため日夜機織りに精出すセツの健気さをハーンはいとおしくおもった。そして一雄の言葉で言え
ば、「すべてを承知の上、セツを救う気持ちで結婚した」のだった。

セツは、機織りの注文を受けるための商品見本帖ともいうべき小さな織物の布綴りを持っていた。それは今では松江の小泉八雲記念館に展示されているが、藍色を主体とした縞模様が多く、丁寧で丹念な仕事ぶりが滲みでているような美しい織である。ハーンもセツもこの布綴りを誇りに思い、大事に取っておいた。そして、後、子供たちがセツの節くれたった手のことを気にしたとき、ハーンは、その手は母の勤勉労苦と孝心の尊い証なのだから、と諄々と説いて聞かせたという。

●『思い出の記』

ハーンとセツは、当初のいきさつはどうであれ、やがて、後年萩原朔太郎が『小泉八雲の家庭生活』という文章で羨望と憧憬の念を表すほど、仲睦まじい夫婦になっていく。ハーンにしてみれば、四十年の放浪の生涯の果てに初めて味わう家庭の暖かさであり、それゆえ一層、家族をいとおしみ慈しんで大切に守った。これまでも何度か引用してきた、「ヘルンさん言葉」といわれるハーンの独特の日本語は、ふたりが会話をやりとりするうちに、ふたりでつくりあげたものである。そしてセツは単に良き妻となったばかりでなく、ハーンにさまざまな日本の民話や怪談を語って聞かせ、良き助力者ともなった。『怪談』などの著作はセツの協力のたまものであった。

セツはまた晩年、夫の回想を『思い出の記』という文章に残している。これはセツの語りを親類の者が書き取ったもののだが、数多いハーンの伝記のなかで、ハーンの人となりをいちばん如実に生彩に富む筆致で伝えている。ハーン作品に劣らぬ、読み応えのある美しい文である。ハーン研究の第一級の資料であるこの『思い出の記』を読むと、いかにもハーンの性格と生活ぶりを髣髴とさせる様々なエピソードを生き生きとつづる巧みな語り口に、セツの並々ならぬ文学的才能を感じると同時に、はるか以前に亡くなった夫のことをここまで深い愛情をもって想起し語ることができるのか、逆にいえばそれだけセツもまたハーンに愛されていたのかと、萩原朔太郎ならずとも羨望の念を禁じえないだろう。ふたりの夫婦生活はハーンが五十四歳でなくなるまでの僅か四年間だったが、濃やかな愛情と幸せに満ち溢れたものだった。

セツは回想する。「私の参りました頃には、一脚のテーブルと一個の椅子と、少しの書物と、一着の洋服と一かさねの日本服位のものしかございませんでした。学校から帰るとすぐに日本服に着替え、座布団に座って煙草を吸いました。食事は日本料理で、日本人のように箸で食べていました。」⁽¹⁸⁾

セツは幼いころに、松江藩に雇われていたフランス軍人のワレットに会って頭をなでてもらったことがあり、その時もらった懐中時計を大事に持っていた。そのために、当時の他の普通の人ほど、「異人」に対する不安や先入観はなかった。それでも、ハーンが「何事も日本風を好み、万事日本風にと近づいて」いたことに随分と安堵したに違いない。

『思い出の記』には、そんなセツがハーンの家に入ってまもなく、春まだ寒さの身にしむ頃の、ある出来事が記されている。ある夕方、セツが軒端に立って、湖の景色を眺めていると、すぐ下の渚で子供が四、五人、小さい子猫を水に沈めたり出したりしていじめていた。セツは子供たちから猫を取り上げて家に連れ帰り、ハーンにその話をすると、ハーンは「お可哀そうの子猫、むごい子供ですね——」と言いながら、そのびっしょり濡れてぶるぶるふるえているのを、そのまま自分の懐に入れて暖めてやったという。セツは「その時私は大層感心いたしました」と述べている。要するに、この時、セツはハーンの心の優しさに触れた思いがしたのだろう。「私が申しますのは少し変でございますが、ヘルンは極く正直者でした。微塵も悪い心のない人でした。女よりも優しい親切なところがありました。ただ幼少の時から世の悪者どもにいじめられて泣いて参りましたから、一刻者で感情の鋭敏な事は驚く程でした」とセツは言う。例の富田屋の養女の眼病の一件などで、ハーンの気性の激しい面に驚きながらも、セツはハーンに対して暖かく理解を深めていくのだった。

●北堀の武家屋敷

季節がめぐって新緑が美しく映えるころには、ふたりはもう夫婦同然になっていた。周囲にも、二人の関係は

「妾」という留保つきながらも認められていた。当時の新聞は、ハーンがセツの、「己の欲をそいで養家と実家双方に仕送りするその孝心ぶりを賞して」、実家のために殿町に家を用意し、家財道具もそろえて十五円(月々?)を与えたことを報じている。

セツの存在は、また、これまで何が何でも日本風に馴染もうと努力していたハーン的生活に落ち着きをも与えていった。

ハーンはあいかわらず徹底して和食で貫こうとしてきたが、さすがに一年もすると、体調を崩してしまい、まるで絶食あけのように飢えて肉類を食べる、ということがあったらしい。チェンバレン宛てに一八九一年の六月、こう書き記している。「十カ月の間、もっぱら日本食ばかり食べた後で、(ほんの二日間だけでも!)私はどうしてもエジプトの饗宴に逆戻りせざるをえませんでした。身体をこわして、日本食では元氣を取り戻すことができなかつたのです。玉子で精をつけようとしても駄目でした。私は牛肉、鳥肉、ソーセージ、それにフライにした腹ごたえのあるものをたらふく貪り食い、ものすごい量のビールをがぶがぶ飲みました——実に恥ずかしい限りです。しかしこれは私が悪いのでも日本人が悪いのでもありません。私の祖先——つまり北方人類の獯猛で狼きながらの遺伝的本能および性向が悪いのです。親の因果は云々です。」以後、ハーンは家族と同じ和食に自分だけステーキや時にはプディングを添えるということにし、晩年までこの習慣は続く。ハーンなりのペースで折衷した暮らしぶりの家庭を二人で築きあげていく、手始めだった。

六月二十二日にふたりは、末次の離れ座敷では手狭だったため、松江城近くの北堀に屋敷を一軒借りて転居し、一家を構えた。新しく雇われていた女中のヤオと、さきほどの子猫も一緒だった。根岸という士族の家で、

後、その子息でハーンの教え子でもあった根岸磐井は『松江における小泉八雲』（昭和五年）という伝記を書くことになる。現在は小泉八雲旧居として保存されており、その隣に記念館がある。

根岸邸は部屋数が十、畳敷五十二の広々とした家で、家賃が三円だったという。ハーンはこの武家屋敷のたたくずまいが気に入った。湖の眺望のないのが残念だったが、そのかわり町の騒々しさを離れた屋敷街にあり、昔風の立派な門の前には内濠の川が流れて、その向こう岸の森の間からお城の天主閣が望めた。家の内外の造りも上品で風格があった。そして城山の反対側には、樹木が生い繁り山鳩や鶯の鳴く丘があって、その丘を背にした美しい庭が家を取り囲んでいた。

● 「ある日本の庭で」

ハーンは学校の勤めから帰ると和服に着替え、縁側の日陰にうずくまってぼんやりと庭を眺めてすごし、あるいは浴衣に下駄履きで散歩しては喜んでいたという。「ある日本の庭で」は、ハーンがとりわけ愛したこの庭園を舞台にしたエッセイである。

ハーンは、自分の庭をつぶさに観察し、描写している。山水づくりの池にはじまり、築山、石や灯籠の配置からその美学を探り、さまざまな種類の樹木や花の名前をあげてその魅力的な風情を述べ、また庭に生息する虫や蛙、野鳥などの小動物たちの生態と鳴き声をつぎつぎと列記している。

そして最後に、「古い家中屋敷もその庭もこれら全てのものが姿を消してしまうのにそう長い年月はかかるまい。……古風なこの出雲の町も、ことによると十年以内に実現されるかもしれない鉄道の開通で膨れ上がり、変

貌し、俗化するだろう。他所という地所が工場や製作所の建設用地に転用されるだろう。ここ松江ばかりでなく、日本全土から、昔ながらの平安と魅力とが消え去る運命にある。……⁽²⁰⁾と結んでいる。よく引用されるこの条りがあるために、「ある日本の庭で」は庭づくりに見られる日本古来の美学に迫り、日本の急速な近代化と西洋化を憂え、非難した文化論とみるむぎが多い。

だがハーンの文章の魅力はそんな平凡な文明批評にあるのではない。たしかに、外国の読者に紹介することが目的の一種の日本文化論ではあるが、いかにもハーンらしいのは、ひとつひとつの花や樹木、生き物にまつわる言い伝えや迷信、童歌を書き添え、そして虫や鳥の鳴き声を聞きとって、まるで音楽の歌詞のようにそれを記していることである。

●アニミズム

ハーンは万物に靈魂が宿るとする原始的なアニミズム思想に共感した人だった。幼いころ、アイルランドの乳母が語ってくれたケルトの神話や伝説は、キリスト教が侵入する以前のドルイド教の自然崇拜、特に樹靈信仰を色濃く残していた。また母親を慕って少年時代に密かに読みふけたギリシャ神話の本には、森の精のニンフの挿絵があった。だから、日本に来て、柳の木にまつわる悲しい言い伝えを聞くと、樹の精に関するギリシャの古い夢想を思い出して何ともいえぬ親しみを感じたのだった。美しい柳の木の霊が武士の妻となり、子供までなしながら、その木が切り倒されたために命奪われて夫のもとから消えるというこの話はハーンの脳裏に刻みこまれたのだろう。晩年の「青柳物語」という再話作品に結実する。

人間以外の自然にも魂の存在を認めるそのようなハーンの感性は、庭に棲む小さな生き物たちの世界をも実にこまやかに記している。雨蛙、ひきがえるなど蛙の種類から始まり、蝸牛、亀、イモリ、トカゲ、蛇、そして虫たち。トンボ、カマキリ、蚊、蛾、兜虫と挙げていく中で、ハーンが一番愛したのが「庭の音楽家」の蟬だった。

夏蟬は甲高いクレシェンドで「ジーーーーーイイイイ」と鳴き、みんな蟬はその名のとおり歌い方をすする。ひぐらしは小さな鐘がせわしく打ち鳴らされるような「カナ、カナ、カナ、カナ」という澄みきった音を出す、一方鳥の歌そっくりで驚かされるのがつくつくぼうしの声である。そして日本人はそれを「ツクツクツク ウイス ツクツクツク ウイス、ウイオース」と表現する……。

ハーンは、このように「蟬のオーケストラ」を描写していく。虫たちに続くのは、後ろの岡から訪れてくれる野鳥たち、ほととぎす、鶯、梟、鳶、山鳩などであった。鳥たちの鳴き声も、虫の声と同じく、ハーンは日本語の擬音をそのままローマ字にして挿入する。

●ロテイの蟬時雨

ハーンは夏の蟬や秋のキリギリスの鳴き声に心地よい音楽を感じた。西洋人に似合わずこのように極めて珍しく虫の音色に美を感じたこと、また後に東大で「虫の詩」と題して虫の文学があるのは日本人と古代ギリシャ人のみである趣旨の講義をしたことなどは、ハーンがいかに日本人の伝統的感性を理解しえたかの代表的な証左としてハーンの研究者は好んで取り上げてきた。

日本人と違って西洋人の耳は普通、虫の声をうるさいとしか感じられないことは、今ではあまりに知れわたった比較文化論となっていて、たとえば、アメリカに持っていった映画のフィルムに効果音として入っていた秋の虫のすだき声を聞いた向こうのプロデューサーが「この雑音は何だ」と聞いた、などというエピソードは枚挙にいとまがないほどである。

ハーンが一時愛読したエキゾチスム作家のピエール・ロティも『お菊さん』(二八七七)のなかで、日本の夏を特徴づける最大のものとして蟬の鳴き声を随所にあげながら、「山あいには蟬の音楽が恐ろしく鳴り響いていた。この音は浜から浜へと呼応していた。山々も限りなき彼らの騒音を反響していた。国中がガラスのように絶え間なく震動するかと思われた。」⁽²¹⁾「いつも、鋭い、無数の、絶え間なき、昼も夜も日本の村々から聞こえてくる、あの蟬の声。昼のどんな暑い時刻にも、夜のどんな冷たい時刻にもかまいなく至る所で、間断なく鳴いている……その声はつきまとして疲れることを知らない。」⁽²²⁾と、このように描写している。ロティにとって、蟬の声はただうるさく、鬱陶しく、圧迫感があつて神経を参らせ、苛立たせるものでしかなかった。

ハーンはおそらく松江の朝の描写と同様に、ロティのこの蟬時雨の象徴的描写を念頭に置き、暗にその反論の意味を託しつつ、蟬の音楽の魅力を書いたと思われる。

●熱帯の庭

ハーンが聴覚を巧みに活用して異国の人々の生活を描いたことは、「神々の国の首都」の中の松江の朝夕の情景にもみてとれたが、ハーンはもともと、自然そのものの音を聞きとる鋭敏な耳をもった人だった。

西インド諸島に滞在した時、ハーンは寝苦しい夜中、起き上がって窓辺の揺り椅子にすわり、よく葉巻の煙をくゆらせながらぼんやり庭を眺めた。そしてその庭から感じる熱帯地方特有の音の世界を回想して後に「薄明の認識」に記している。窓を明け放つても、夜気はそよりともしない。大きな蝙蝠が窓からひらひらと音もなく出たり入ったりする。庭からは熟した果実の匂いがたちこめている。椰子やバナナの木がまるで金属で造られているかのごとく、微動だにせず立っている。そして「町の上手の森からは、雨蛙と虫と夜鳴鳥のいつもの夜の合唱が轟いてくる——嵐のごときその騒々しさは、どのようにたとえてみても、とても正確には描写しきれないが、りんりんと鳴る無数の鋭い音の重なりが、あたかも壊れたガラスの破片が巨大な滝となって、ゆっくりと降りそそぐさまを想像させるのである。」²³

熱帯地方では真昼にも仮眠する。ハーンはこのシエスタの半ばに自分の汗の不快感で眼覚めると、やはり窓辺に行つて外の様子を眺めた。道行く人の姿もうち絶えた昼下がりに、眼の眩みそうな太陽の無慈悲な日差しに椰子の木々もうなだれ、夜の虫の音の騒がしさとは全く逆に、物音ひとつしない不気味なほどの静けさが支配するのだった。

熱帯の庭と日本の庭が、庭をぼんやりと眺めるハーンの姿という構図、木々、小動物、虫の音といった構成要素が同じでありながら、全く対照的な描写になっているのは、単に客観的自然状況の違いのせいばかりではない。ハーンの熱帯の虫の音の表現と、ロティの日本の蟬時雨の表現は、両方ともに、無数の「ガラス」の冷たい金属的な絶え間ない響きに譬えられていて、驚くほど酷似している。二人の耳に聞こえた音の世界の類似は、西インド諸島にいた頃のハーンの状態が、日本でのロティの状態に近かったことを示すものだろう。庭は、

ハーンの時々の心象の投影でもあったのである。

● 小ききものへの眼差し

ハーンが生き物に愛情をかけたというエピソードは多い。先の子猫もそうだし、また北堀の家では、蛙を蛇から助けるために、蛇にわざわざ餌を与えたという。そして蛇はこちらに悪意がなければ別に害をなすものではないと言って、決して殺させなかった。だが、ハーンのはいわゆる動物好きというのではない。欧米の十九世紀と
いうのは、それまではもっぱら王侯貴族のものだった動物愛好の趣味が一般市民にまで広がった時代である。動物園では珍しい異国の動物を見ることができ、犬や小鳥などのペットを飼うことが大流行した。だがハーンには、大型の野生動物に対する関心もなければ、ペット飼育の趣味も皆無だった。ハーンの眼差しは、ただひたすら自然のなかの小きき生命体、逆にいえば、大自然の広大な命を宿した小ききものにそそがれたのだった。

そしてその眼差しは「子供」の眼差しだったといっている。ハーンは述べる。「貧しい家の子供の遊び場が寺の境内であるように、良家の子供のそれはいつも自宅の庭だ。幼いものたちが草や木の不思議な生態、あるいは虫の世界の驚異について、初めて何かを学ぶのは、庭のなかだ。それに、日本の民間伝承の非常に魅力的な部分をなしている鳥や花をめぐるきれいな伝説や歌を、彼らが初めて教わるのも庭でだ。」²⁴ ハーンはあたかも自分自身がその幼い日本人の子供に同化したかのように、庭の草木や虫のひとつひとつを無心に、眼を丸くしながら見つけていく。

そして子供がホタルに向かって歌う

「ホタル コーエ ミズ ノマシヨ、

アチ ノ ミズ ワ ニガイゾ、

コチ ノ ミズ ワ アマイゾ」

という可愛い歌や、カタツムリに角をださせるおまじないの童歌

「ダイダイムシ、ダイダイムシ、ツノ チット ダシヤレ、

アメ カゼ フク カラ ツノ チット ダシヤレ」

などを喜んで書きとめるのだった。

ハーンはもともと非常な虫好きで、ファーブルの昆虫記をはじめとして昆虫の研究書を何冊も持っていた。そしてアメリカ時代には、熱帯に生息する様々な異様な虫や爬虫類について調べた文章を残している。だが、松江のハーンにはもはやそのようなエキゾチスムに彩られた博物学的な視点はない。無邪気な子供のような気持ちでみつめているのである。

庭に来た鳥のなかでハーンが一番好きだったのは、山鳩だった。

「テテ ポッポー、

カカ ポッポー、

テテ ポッポー、

カカ ポッポー、

テテ……」

松江のハーン(三)

ハーンはこの山鳩の鳴き声を繰り返し書き記している。「テテ」は「父」を、「カカ」は「母」を、「ポッポー」は「胸」を表す幼児語だと聞き知ったことで、おそらく一層興味をかきたてられたのだろう。それは幼い日の郷愁を誘う歌だった。セツはハーンが晩年までも山鳩の声が好きでよく自分で真似して見せたという。ハーンが学校の勤めから帰り、北堀の武家屋敷の縁側に一人うずくまって庭をながめ、「父の胸、母の胸、父の胸、母の胸、……」と歌う山鳩ののどかな声に耳を澄ませていた時、ハーンは人生の時を遡行していた。そして、かつて自分が西インド諸島で、またロティが長崎で感じたような苛立ちも庄迫感をも覚えることなく、人間と自然が融けあった始源の喜びに浸りつつ、セツと築きつつあった新たな生活に静かな幸せを感じていたのだった。(続く)

注

- (1) 「英語教師の日記から」、『小泉八雲作品集―日本の印象―』河出書房新社、一九七七年、九七頁。
- (2) 同右、一二二頁。
- (3) 同右、一〇二頁、一〇八頁、一一〇頁。
- (4) 同右、九五頁。
- (5) 同右、一三一頁、文中の石原は、後に衛生学者となった東京帝国大学教授石原喜久太郎のことである。
- (6) 同右、一三五頁。
- (7) ラフカディオ・ハーン著作集第十四巻書簡篇、恒文社。以下の書簡についても同じ。
- (8) A・サトウ宛手紙(一九〇六年三月)、楠屋重敏『ネズミはまだ生きている』雄松堂、一九八六、五一―八頁。
- (9) 同右、四七三―四七四頁。
- (10) 小泉節子「思い出の記」、田部隆次『小泉八雲』所収、北星堂、昭和二十六年、一四七頁。

- (11) 同右。
- (12) イザベラ・バード『日本奥地紀行』高梨健吉訳、平凡社東洋文庫、一九七三年、八四頁。
- (13) 前掲書、九一頁。
- (14) 同右、一二三頁。
- (15) 前掲書、二四頁。
- (16) 「思い出の記」、前掲書、一四五頁。
- (17) 同右。
- (18) 同右、一四六頁。
- (19) 同右、一四八頁。
- (20) 「ある日本の庭で」前掲書、一九三頁。
- (21) ピエール・ロティ『お菊さん』野上豊一郎訳、岩波文庫、一九二九年、十頁。
- (22) 同右、八頁。
- (23) 「薄明の認識」(脱稿一八九五年十二月)後に『異国風物と回想』(一八九八年)所収、『小泉八雲作品集―仏の畑の落穂他』恒文社、四七二頁。
- (24) 前掲書、一七三頁。